

たのは、享保十八年九月のことで、このころになってようやく危機を脱し、安定を取戻したと思われる。この飢饉で佐賀藩は一挙に八万の人命を失ない、多数の牛馬をなくして田園は荒廃し、幕府に対しては多大の借銀と借米を負うこととなった。享保十六年の佐賀藩の人口は三十七万に達していたが、飢饉のすんだ翌年の享保十九年には二十九万に減り、比率では二十パーセントの人が飢饉の犠牲となったのである。この大飢饉の影響は六十余年を経てもなお回復せず、寛政のころまで荒れた地が残っていたと言われている。

平野部落の西方に俗に「つうじょう屋敷」と呼ばれる所がある。これは大庄屋敷の意で、ここが大庄屋であった中原只右衛門の屋敷跡と言われている。更にその南方に「倉前」の地名が残っているのは、恐らく郷内の納米を入れる倉庫が建てられていたのではないかと思われる。

### 餓死塔

大庄屋中原只右衛門尉正純は大飢饉の危機を脱すると、佐保川島郷内の餓死者供養塔を平野の龍徳院に建立したのが今日も残っていて、その塔の正面に

佐嘉郡佐保川嶋郷内  
九男女貳千六百四十餘人餓死塔  
無主孤魂無邊幽靈等

と記してあり、左側面から右側面にかけては、漢文で左記のよう  
な意味の碑文が刻まれている。

『享保十七年より同十八年にわたり五穀みのらず飢饉となった。

藩主も倉庫を開いて救援米としたが救うことができない。諸国、貴賤を問わず飢に苦しみ、ついに餓死

者の屍は路に重なり合い、その数は数千に及び何とも施す術がない。茲に中原只右衛門正純は佐保川島郷のために救援に尽くしたが力が及ばなかった。そこで郷内餓死者の魂を弔うために、ここに餓死塔一基を建立した。』

更に、餓死塔の左側には同じ施主によって天明四年（一七八四）に大乘妙典一千余部を納め供養した塔も建てられている。この龍徳院は慶長のころから約三百五十年間続いている寺院であるが、現在には中極の宝田寺が兼務している。三十数年前までは餓死塔供養の草相撲が毎年行われていたが今日はそれもなく忘れられたままである。

又、久留間の曹洞宗藏福寺の旧境内にある餓死塔は高さ約一メートルで、正面に「餓死諸亡霊塔」と刻まれ、右側面に宝暦七年（一七五七）十一月十五日当寺の得容和尚建立と刻んである。同寺では毎年餓死者の供養を行っている。

## 五、藩政時代の偉人

### 1 成富兵庫茂安と石井樋

#### (1) 茂安の功績

封建社会の基盤は農業であったので、幕府を始めとして大名も武士も農業を大切にし、水利事業等には特に力を注ぎ、今日までその恩恵を受けているものも沢山ある。その一つに石井樋がある。佐賀藩で

は成富兵庫茂安が中心となって治水土木の事業を完成した。茂安は永禄三年（一五六〇）に鍋島町増田に生まれ、幼名を千代師丸又は新九郎と言ひ、のち信安、中ごろ十右衛門といった。茂安が十一才の時、大友勢八万といわれる大軍がわずか数千の佐賀城を包囲し、まさに孤城落日を思わせるように切迫してゐた。茂安の父信種は直茂に従ひ、今山夜襲軍に加わる事になった。茂安は父が止めるのも聞かず、戦争見物に出かけている。隆信はあとでこのことを聞き、彼の豪胆に驚きかつ感銘し、直ちに小姓に召し抱えた。茂安が十七才の天正四年（一五七六）藤津郡横沢城攻めに参戦したのが初陣である。

彼は龍造寺隆信について政家・鍋島直茂・勝茂父子に仕え、直茂の「茂」の一字を授けられ茂安と改め兵庫助と称した。肥後の加藤清正を始め豊臣秀吉、徳川家康にも愛され、特に清正より一万石の知行をもつて誘われる程であった。茂安は治水に非凡であるばかりでなく、築城にも秀で熊本城、大阪城、名古屋城、江戸城等にも携わるなど、名将でかつ民政家で、しかも治山治水、干拓土工の技術家として歴史上大きな業績を残した。茂安の行った治水工事は千栗土居（千栗堤）、石井樋、多布施川、牛津水道など二十余か所で、千栗土居は筑後川の氾濫を防ぐために十二年の歳月を費して設けられた延十二キロに及ぶ大防壁であり、これで大氾濫による大被害を最小限度に食い止めた。そこで千栗近郊の人々は村の名を「茂安村」として、その功績を永遠に残した。

又佐賀市付近は、古くから治水工事が不完全で水害・干害が多かつたので、多布施川を築造し、川上川からの分岐点に大きな石閘を設けることによつて、水利の便を計ろうとしたのが石井樋の始まりであ

る

今ここを訪れると「成富君水功之碑」が建てられている。この碑は武富時敏が明治二十一年ごろ、年若くして佐賀郡長の職にあつた時、有志と相計り水功碑を建設しようとして尽力し、その後任郡長の横尾純喬が完成したものである。この碑面の題字は副島種臣の書で、碑文は文科大学（東大）教授久米邦武の撰になり、書は武富誠修である。

又各地の山麓に溜池を築造配置し、放水量の調節に尺八（尺八のような穴の井樋）というものを作つたのも茂安の発案で、当時としては驚嘆すべき発想であつた。その他疎水工事によつて荒野を開墾させ美田のもとを作り、藩祖鍋島直茂公をして諸大名中の治国第一の名君と言わしめたのも、実に茂安の功績であつたのである。佐賀市兵庫町も当時沢であつたのを開拓させると共に、水路を開発して沃田となした。兵庫村の名は茂安の徳を慕つて付けたものである。

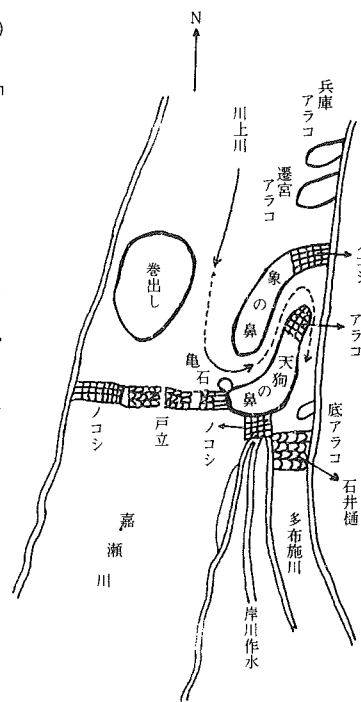
## (2) 石井樋

明治十三年七月、長崎県より河上川筋等についての問答書に

『この北村から多布施に通ずる分水は、往古からの事で詳らかでない。しかし、佐賀への水流は鎌倉時代にはあつた事は古書に見える。藩史にも「元龜二年北村の井関普請云々」と記されている。その後元和のころ成富兵庫茂安が分水口を石井樋（三双樋）にかえ、象の鼻や川中島を築き、天狗の鼻の奇工をし、水流を迂回させて石井樋に巡らせ、余水は島と井樋との間より又本川に流失させた。ここにも戸

立を設け、橋を「島とり橋」といった。寛文十年卯月八日修造し、樋中に観音の像を彫刻並びに役務者名を刻んだ。寛政のころ（一七八九—一八〇一）井樋に数か所の戸立を造った。

という記録がある。すなわち、石井樋は元和元年（一六一五）頃成富兵庫茂安が水利に乏しい佐賀の城下町や与賀、川副、鍋島方面の用水として、川上川の清流を多布施川に引き入れるために、川砂を除いた上水をどうして流すか、水量をどうして調節するかに心を傾けた工事である。この築造は今日でも日本土木史に残る立派なものといわれている。天保五年（一八三四）四月、佐賀藩士南部長恒著になる「疎導要書」によると、石井樋の見取図は次のようになっていた。



◎ この見取図にある象の鼻・天狗の鼻は川の水を逆流させることによって、流水の激しい水勢を一度弱めて、水から砂を離し、その水を多布施川に注ごうというものである。これによって砂が多布施川に流れ込まなくなると共に、洪水の時に大水が来る心配もなくなるわけである。

◎ 「ノコシ」というのは、洪水に備え堤防の決壊を防ぐための工夫であり、象の鼻の「ノコシ」は洪水の時に、象の鼻に加わる水圧と両鼻間を逆流して上る水圧とを調和するためのものである。

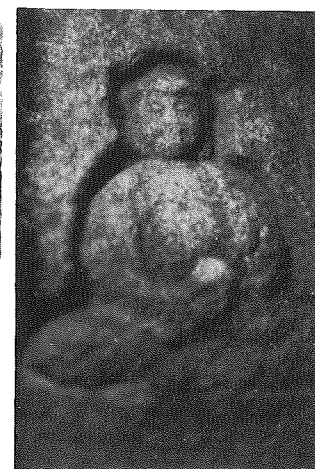
◎ 「アラコ」というのは、砂を止める役目をし、「亀石」は西から来た水をこれにあて、砂の流れを止め、上水だけを流す仕掛けである。

◎ 「戸立」の所は、初め乱杭を打込み、土俵を盛って水を止め、象の鼻より石井樋に回し、余った水は大川に流し、洪水の時には打ち崩れていたもので、土砂は嘉瀬川に打ち出していた。ところが度々の洪水で人手がかかるので、切石をもって高さ一メートル余に丈夫な井手を築き、三つの戸立をこしらえた。平素は戸を立てて石井樋に水を流し、洪水の時は戸を切り開けて下流に流す仕掛けにしている。人手もいらなくなった。しかし、広い面積の巻出し（砂だまり）ができるようになった。この砂は石井樋を通して流れるので、川床は高くなりどうすることもできなくなった。そこでこれも又改修し、西側に十八メートルくらいの「ノコシ」を水底の高さに築き、平素は土俵を積み水をため、石井樋の閉止めや修理、洪水の際はこれを取り去って調節するようにした。

こうした兵庫の洪水対策は漢民族が数千年来黄河の猛威に悩まされてやっと会得した「水に反抗せず水を自然に流す」方策を研究し、いわゆる今日の「洪水分散式」をとり、「水を走らせず、いかにすれば水がゆっくり歩くか」を工夫したものである。石井樋は側面及び天井面を板石で囲んだ暗渠（あみきよ）になっていて、この石井樋が三つ併設されている。その中央の暗渠の天井石には観音像が刻まれていて、毎年春季に石井樋を締切り（これを川干かわひとか川留かわどめ、干落ひおちとかいい、一週間あて三回行つ）、この期間に多布施川筋一帯の川さらえを実施する慣例であるが、この川留の時には観音に詣でる人が多く、難工事であった往時を思い

浮かべたことであろう。以前はこの観音信仰者が列を作つて参詣し、燈明と線香が絶えなかつたという。

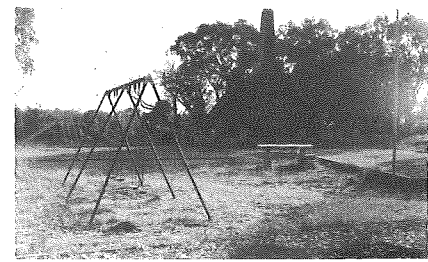
又石間の天井石に左記のような文字が刻まれており、寛文十年（一六七〇）四月に修覆されていることがわかる。



観音像

石井樋修造

- 役務 深堀新左衛門正辰
  - 総奉行 伊香賀吉兵衛直好
  - 下郡代 蒲原源右衛門俊長
  - 郡目付 富永喜右衛門明英
  - 奉行 牧口与兵衛辰重
  - 奉行 大石五郎左衛門宗房
  - 石工 武富清右衛門増重
- 寛文十庚戌卯月八日



石井樋公園

この石井樋も戦後の洪水で戸立の所も度々破壊されたが、昭和三十五年幹線水路が完成し、駄市川原分水口より南下した水路が更に多布施川と鍋島幹線に分水され、石井樋もその用がなくなり、今は昔の面影を留めるだけ

である。石井樋は初めは井樋の名称であつたが、後には付近に人家もできて、今日では部落名ともなっている。大和町ではここを公園とし、いこいの場としている。

成富君水功之碑 明治二十四年 副島種臣書 (印の字は当用漢字に書きかえた字)

環島水有奇状其代天成工者誰成富兵庫助君也諱茂安其先漢部由韓土来伝文史與蚕職黼黻大倭之盛治後昆奮武天慶之乱大藏春実来綏筑紫因留處焉世襲大宰職迨至寛仁裔孫種村攘女眞寇其族繁滋在筑前為原田氏在筑後為三原氏而江上成富氏著於肥前矣初寿永西播原田種直首唱勤王鎌倉府興江上氏始徙肥前其後分為吉里氏四世諱良種始称成富氏曾孫諱種秀属龍造寺是為君曾祖祖諱種貞多戰功父諱信種兼嫻辞命以永禄庚申生君於佐嘉郡益田君年十七始従軍樹功二十攻筑後一月十勝隆信公劇賞命称十右衛門三十三征韓師起直茂公擢將先鋒隊嘗報事名護屋豊臣太閤召見聞君唐島吉州成興等戰狀不勝壯快方食拳碗盛酒曰壯士飲之拳座称榮其武如此四十一頭関東師還曰乱已定矣富国之道可專講也乃尽力勸農墾山野填斥鹵疏川開渠藩封十郡山蔚而野潤莫不存厥績而以此島之瀾開為最大工也登島北胆山嶺層復天山起西脊振聳東其水右泻左注鐘八百八溪而就平地急流箭直河闊水壯群壑皆花崗石蝕剝陶汰石英雲母随流而下水清而甘浩沙如雪映日發金銀光雨潦至則暴漲如萬里脱羈絆堰樹軫石潰決四出其害不可禦也河水過此闊九十間南為嘉瀬川入海東分為多布施川自古設閘曰北村石関佐嘉城利害之所繫故君特殫匠心就北岸築洲觜勾弯沿流以蔽川口曰象鼻長四十五間濶五間漸殺至三間止措盤石鎮之曰龜石島之北角相距僅七間交互对峙曰天狗鼻兩鼻固築石為其乃以土豚堰本川之流水一頓而逆流激激石怒跳碎碎入兩鼻之間則較寬將倍濶既

旋回而南乃左右支吾漸狹十間於是造石閘以吞之閘五間水底設暗障以蔽其前余水落堰下乃成是島設水閘曰島取橋乎水半間涸皆閘漲皆開故佐嘉無旱澇其他制水扞沙多所敷設用巧精到其慮甚深遠矣今石閘寬文庚戌造從君遺範也後人慣利而不講其所敷設浸殘夷又洪水輒蕩決土豚修補苦煩至寬政際以石代之猶壞天保之季迫象鼻築石堰則其觀美而勞省從是游沙不決龜石漸沒水暗障不可復見古者水深三尺今則不及半流沙及田蓋悔之矣君既修源乃遵下流紆余曲折以至佐嘉佐右派始繆鑿城中五千戸無不依流郡中水田九千余町受其浸水穫稻無慮十五六萬斛生齒繁息及十萬口余巡諸國未見水利之委曲如佐嘉者也佐嘉俗每年仲春閘石開而瀆下流曰涸落季春每戸祭水神編藁為盆畫紙為幡插青梅枝泥猴為繫結藁以盛供饌號曰兵庫盆豈君所教邪抑祭君也神埼郡水不周乃修窪山源流穿梁十餘町放之豺谷為田手川潤廿余村三根養父二郡緣千歲河數遭泥濘乃築大堤距岸百余步起千粟至坂口面草篠蕩背植楳樹今老翠蒼葱連三里堤外之民不復知水患望以抑景行杵島郡成瀨駛乏水造大日村水閘引塩見川茅野化稻每村民就潮泉寺為兵庫祭不絕肥前人善相山址築堤以瀦水至秋灌田名曰堤亦君所教也同郡燒米堤灌白石鄉穫稻三萬斛元和以降幕府數課諸藩築江戶大阪名古屋諸城君必往督藩工事案圖配布石及主者操工不復移動曾舉君任其工豐成甚完固名動諸藩加藤清正以征韓役器識君及修熊本城招君俱巡視曰非卿無可共語者焉君寬永甲戌九月八日卒年七十有五壯歲執銳士卒樂死晚年徒版築草舍露息与役夫同寢食衆悅趨工其遵水也循性操縱不敢逆前武後文其探如一可謂千古之偉人也勝茂公以四子直弘屬君鞠養君避祿讓之公別賜六百斛養老直弘二兄仕幕府而獨留仕藩故成富氏為藩臣首君子孫襲養老祿亦世為番頭邦人甚重名古者有名代郡君亦行古之遺歟雖然君豈惟賴

祿伝名哉肥前貴賤男女無不知其名近年河水不修思慕益深謀建石島中紀功德正三位勳一等伯爵副島種臣江上氏之胤也作題字余因鬼其譜敘述梗概垂諸不朽 明治二十有四年六月 正六勳五等文科大學教授

久米邦武撰  
武富誠修書

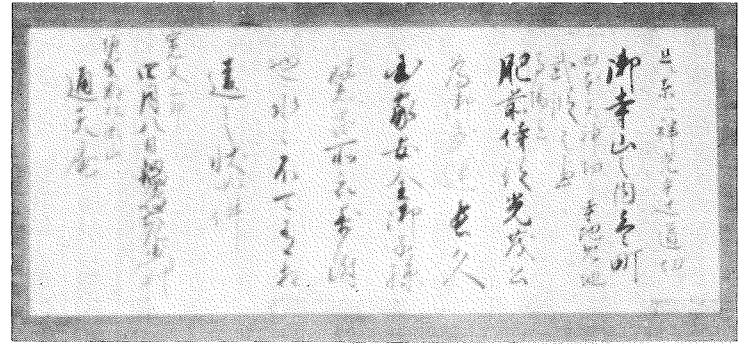
茂安は寛永十一年（一六三四）九月十八日（新曆十一月八日）、七十五才で尼寺築山草庵で永眠したが、末期の約二十年間はこの築山古墳南麓に住み世紀の大事業を先遂した。茂安が築山に住んだのはこの地が成富氏の所領であり、誕生地鍋島の増田が近距離で、又この地区一帯は先主龍造寺家との因縁も深いので選んだものと思われる。

菩提寺である佐賀市本行寺には遺髪のみを埋葬し、遺言により、遺体は築山に埋葬された。このことは昭和十五年墓地改葬の際確認された。しかしその際遺骨は菩提寺である佐賀市本行寺へ改葬された。現在築山の頂上に碑二基があり、正面右の碑の右端の法名「玉心院殿榮久日実神儀」が茂安で、その左側の「慶寿院殿日妙大姉」が妻の碑で、左側の二法名は養子長利夫妻の



成富茂安及びその妻等の墓（築山）





光茂が通天庵にやった寄付状（通天庵蔵）



深江信溪の像

信溪の父茂利はかねてから肥前の名刹安国寺再興を念願していたが、果たすことができないで死んだ。そこで二男空助は父の遺志を果たす

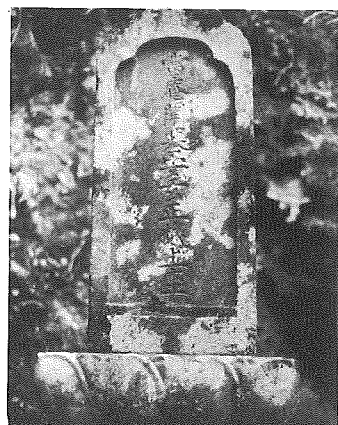
ため、井手にある廃寺同然の信溪山通天庵を復興し、山号を安国山、寺号を通天寺と改め、信溪山の名称を空助自身の号とし、深江平兵衛空助信溪といった。

信溪は賢渚和尚（後に高伝寺十二世）を開山とし、信溪自身は開基となった。万治元年（一六五八）二月のことである。のち通天寺は高伝寺の末寺となった。

○ 永明寺

信溪は当時の社会全般が浮薄になって、敬神崇祖の精神が衰えているのを嘆き、神仏信仰と忠孝の精神を盛んにしようとして、北原村（現在北原団地）にある法華山永明寺という荒れ果てた寺の再興を計り、山林一町（一ヘクタール）余を寄付して成就した。更に寛文二年（一六六二）四十三才の時、大木英鉄、真阿上人らと話し合って、楠公父子の尊像を佐賀城下に奉祀しようと、神社創立の趣意書を作り、奉加帳を回して藩内上下の賛同を得ようとした。この趣意書は

『恐れながら沙彌信溪、謹み申して申さく、それがし人身に生を受け、君臣の交りをなすといえども、不浄垢悪（あかのよに汚れ）の心にして忠孝の誠を失う。天下万民、僧、釈、道にあらざれば、身を立て世を渡る事あたわず。この三つの道共に忠孝を本とす。ほぼこの理を尽すといえども業因深くいたずらに四十三年の春秋を送る。——中略——願わくは日本無双の名将、忠孝の勇士なれば、楠河内守正成公、同帯刀正行の面影を作りて、予が草庵に崇め、心あらん朋友等に拜ませて、人の心に忠孝を深くせしめん事を。大名たり釈門たらん人はこの両将のために塔をも建て寺をも作り、かつは亡魂を弔い、かつは仏法王法の助護ともなすべきに、さばかりの名将のため寺をも建てず、堂をも作らず、誦経念仏する人もなく、空しく三百余年を送る。浅ましきにあらずや。それがし且暮（朝夕）にこれを思うといえども、財なく徳なきの隠れ人、更に言葉に出すべきにもあらず。心を同じゆうするの僧俗によつやくこの事を語る。在家には大木英鉄という者、法師には真阿上人のみ、この両将を重んじて絵にかき文字に書き、その跡を問い深く忠孝を貴はん。天下広ければ寺をも建て、影を作りて崇むる人有るまじきに



深江信溪の墓 (通天寺)

もあらざれども、摂津兵庫塚を見れば、草木の上に植えたるのみなり。浅ましきかな。世に忠実の人なく孝真の人なきが故に、我らの如き不義のやから世に多きものなるにや、これによりそれがしいやししくも両公の尊影を作り、父母主君の名号と共にこの影を拝み、燈花の一閑となさん—以下略—  
と赤誠あふれる文で書かれている。この切々たる心は藩主光茂を動かし、世子綱茂、蓮池藩祖直澄、小城藩主直能を初め二百三十余人の賛同署名を得た。そこで京都に上り仏師法橋宗南に依頼して、楠公父子桜井駅訣別の甲冑尊像を作り厨子に入れて佐賀に持ち帰った。

信溪はこの尊像を寛文三年(一六六四)五月二十五日北原村永明寺に安置し、自分で祭事を営みその霊を慰めると共に、人々にその美德を教えた。これは我国において、おおよげに楠公をまつた最初であり、元禄五年(一六九二)徳川光圀が湊川(神戸)に建てた「嗚呼忠臣楠氏之墓」の碑よりも二十九年前のことであつた。

その後信溪は亡くなり、この尊像は行方不明になっていたが、文化十三年(一八一六)の春佐賀市本庄町の鍋島家菩提寺である高伝寺の楼上に放置されていたものを発見し修復した。嘉永三年(一八五〇)五月になって、枝吉経種(神陽)は弟子の江藤新平・大隈重信・大木喬任・副島種臣らと計って、義祭



北原村永明寺付近 (天明絵図)

同盟を組織し、この会によって同年五月二十四日、尊像を佐賀市本庄町の梅林庵に安置して祭った。

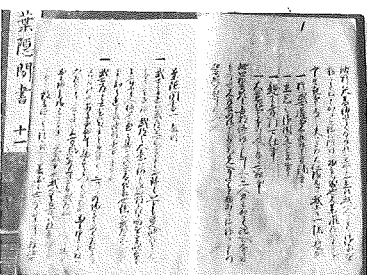
しかし、安政元年(一八五四)には、佐賀市白山町の八幡神社境内に新しく楠公社を造りここに祭った。これが現在の楠公社であり、この尊像が祭神である。

北原の永明寺は今廃寺となり、寺地は大和団地となっている。信溪は晩年を通天寺で過したが、天和二年(一六八二)八月五日、六十三才をもってこの地で死んだ。

法名「安玄正機上座」と称し、墓は松瀬井手の通天寺にある。

### 3 葉隠とその教え

葉隠は葉隠聞書ともいう。佐賀藩士山本常朝は二代藩主鍋島光茂が死んだので武士を捨てて髪をおろし金立の黒土原に閑居していたが、同じく光茂に仕えていた御書物役を勤めていた田代陣基も御役御免の身となった。この陣基が常朝を黒土原の草庵に訪ねたのが宝永七年(一七一〇)の三月で、それから享保元年(一七一一)まで前後七年間にわたり常朝の談話や常朝自筆の



「山本神右衛門重澄年譜」「山本神右衛門重澄年譜」「愚見集」「常朝書置」等を参考にして全十一巻にまとめたものである。この葉隠聞書の内容は佐賀藩

の伝統的精神に基づく教訓や藩祖直茂、初代勝茂、勝茂の子忠直、二代光茂、三代綱茂らの言行が前半で述べられ、後半に佐賀藩士達の逸話や史跡・伝説等を集めて述べている。それも名前まであげたのが多いこともあるし、「他見の末には遺恨悪事にもなるべく候間、堅く火中仕るべき由、かえすがえすも御申候也」と、焼き捨てることを命じている。したがって葉隠十一巻は秘本であり、佐賀藩士の間にはこっそり写されて読まれていて、出版されて広く世人に読まれる書でもなく、常朝自身も堅く焼き捨てるように、弟子の陣基に厳命しているのである。そこで藩校の弘道館でもついに教科書として用いられるに至らなかったという。

常朝は湛然和尚、石田一鼎から教えを受けており、この湛然、一鼎、常朝、陣基を「葉隠の四哲」と呼んでいる。この葉隠では武士道を説いたところがよく知られているが、その中心的な考え方は四誓願というもので代表されているといってもよい。四誓願というのは

- 一、武士道においておくれ取り申すまじき事
- 一、主君の御用に立つべき事
- 一、親に孝行仕るべき事
- 一、大慈悲を起し、人の為になるべき事

というのである。葉隠の第十一に「すべての人の為になるは我が仕事と知られざる様に、主君へは陰の奉公が真なり……陰徳を心がけ陽報を存すまじきなり」とあるように、陰の奉公陰徳を重んじ、いやしくも自分の功績を現わすことを競うようなことがあってはならないという意味で葉隠という書名を付けたともいわれ、又田代陣基が山本常朝をたずねたこの地方には「葉がくし」という柿が多くあると

ころから、この柿の葉隠れに語ったためという説もある。更に前述したようにこの葉隠は「追って火中すべし」とあることから、広く世人に読ませる書ではなかったので「葉隠」というともいわれている。

この書は全十一巻、一三五八節から成り、総論として「夜陰の閑談」があり、次に直茂・勝茂の言行が第三巻より第五巻までの大部分を占め、第六巻より第十一巻までは藩士の言行を主として取り上げている。葉隠の根本精神は総論に述べている四誓願であるが、これは石田一鼎の「武士道要鑑抄」の三誓願にならったものと考えられ、この三誓願に慈悲の心を加えて一つのまとまりを付けているものである。

この慈悲の心は恩師湛然和尚の教えによるもので、武士は勇気ばかりでなく、慈悲の心が必要であると説かれていたためと思われる。葉隠の談話はほとんどが四誓願の武勇、忠義、孝行、慈悲であるが、最も強く述べているのは藩主に対する忠義である。

「我が身を主君に奉り、速に死に切つて幽霊になりて、二六時中主君の御事を歎き、無理無体に奉行に好き、無一無二に主人を大切に思へば、それにて済むことなり」

「御主人より懇ろに召し使はれ候時、する奉公は奉公にてなし、御情なく無理千万になさる時、する奉公が奉公」

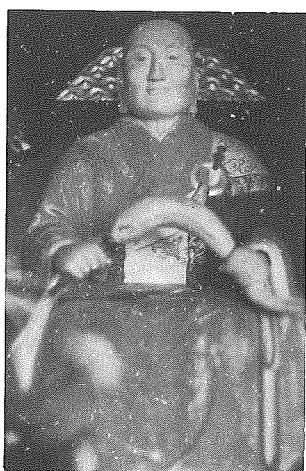
というような献身的忠節であり、

「武士道とは死狂ひなり……本気にて大業ならず、氣違ひになりて死狂ひするまでなり」

「刀を打折れば手にて仕合ひ、手を打落さるれば肩節にてほぐり倒し、肩切離さるれば口にて首の

十や十五は喰い切り申すべく候」とあり、烈々たる気魄のある武士道であるということができ、わが郷土大和町はこの葉隠に関係した史蹟が多く散在しており、又内容的にも郷土に関係したものが見られるが、以下少しその史蹟を探ってみることにする。

(1) 湛然和尚と華藏庵



湛然像 (通天庵蔵)

湛然和尚は鍋島家の菩提寺である高伝寺の第十一世の住職であった。寛文のころ城内中の館田蔵院の住職村了和尚は、かねがねの希望として、田蔵院は龍造寺家純代々の菩提寺だから、藩内十二か寺の列に加えてもらうように願っていた。ところが思うように行かないので、藩主光茂が本庄の慶聞寺へ参詣した機会をとらえて、光茂が礼拝する時仏壇の下から直訴した。光茂は怒って八戸の天福院で寛文九年(一六六九)二月二日死罪にすることになった。

湛然和尚はこのことを聞いて不びんに思い、助命を嘆願したが聞入れられなかったため、その場から直ちに鍋島新庄の東禅寺に入った。これを知った光茂は上使をもって寺に帰ることを勧めたがこれを退け、逆に出国を願うこと数回にも及んだが許されなかった。そこで湛然和尚は出国脱出を図り東禅寺を出て三反田の地藏橋辺りまで来た時、藩の搜索隊に追いつかれ押し問答のすえ、使者は申し開きのため



湛然の墓 (右端)



五輪塔の華藏庵跡

同志を募って境内を整理し、「湛然和尚棲之庵跡」と刻記し、西村謙三氏の碑文を刻んだ五輪塔を建てた。又通天寺にある

に切腹した。そのころ井手の通天寺にいた深江信溪の慰留もあって、一先ずこの通天寺で暮すことになった。その後再三にわたって上使が来て光茂の上意を伝えたので、湛然もようやくこの地に留まることを承諾した。光茂は和尚のために菅の谷・熊の峰の山林を開墾し、薪炭料として山林四町五反(四・五ヘクタール)、寺地七反余(七〇アール)、四間に五間の御堂、庫裡、書院を建て、食料として十石を贈った。これが華藏庵である。和尚はここを訪れる人があれば大慈悲の道を論じ、人去れば座禅二昧に行雲流水、風月を楽しむなどして十有一年の禁足に近い生活をし、延宝八年(一六八〇)十一月十日(新暦十二月

三十日)死去した。大和町松瀬字仲の華藏庵跡にその墓がある。

その後堂宇も消滅し、境内は雑木繁茂し荒廃して、傑僧湛然の名も年と共に忘れられようとしているのを惜しみ、昭和九年

三月福田慶四郎、古川虎雄、上野卯三、木塚嘉一郎の四氏が、

和尚の木像を修理するなど、和尚の事蹟をしのぶと共に世人に対する暁鐘とした。今は杉林の中に五輪塔を見るところ有様であり、この杉林を通り抜けるとやや小高い場所に苔むした湛然和尚外代々の墓が並んでいる。山本常朝はこの湛然和尚の影響を受けたので、葉隠の中には湛然の言行が多く記してあり、

「出家は慈悲を表にして内にあくまで勇氣を貯う、然らざれば仏道の成就出来ざるものなり。武士は勇氣を表に、内心には腹の破るるほど大慈悲を持たざれば家業は立たざるなり。よって出家は武士について勇氣を求め、武士は出家によって慈悲を求むるものなり」

「武士たるものは、忠と孝とを片荷にし、勇氣と慈悲とを片荷にして二六時中肩の割込むほど荷うてさへおれば侍は立つなり」

「朝夕の礼拝、行住坐臥、殿様殿様と唱うべし」

「慈悲というものは、運を育つる母のようなものなり」

などといっている。こつした巖しい言葉の内にも限りなく温かなものが秘められているところが葉隠精神、鍋島武士道の特徴ともいふべきものであり、これはこの湛然和尚の教えを受け継いだものと言われている。松梅の井手に近い上一区（柚木川）に地藏尊があるが、これは湛然を追って来た使者で切腹した者を祭ったものだと言われている。（民俗編伝説の項参照）この地藏尊は石室内に祭られ、その後壁に

願主沙門月海是心

寛文十一年八月彼岸日建

とあり、今からおよそ三百年前の建立で悲劇後二年目に当たる。月海是心は通天庵三代の和尚でその

墓は通天寺墓地にある。地藏尊の後方にある自然石の墓は使者の墓だと伝えられ、それは最初二基であったが、一基は明治四十二年（一九〇九）の山潮で流失し、今は一基のみ残っている。このことから切腹した者は二名であったろうと想像される。

## (2) 石田一鼎と下田

一鼎は名を宣之<sup>のぶゆき</sup>と言い通称安左衛門と称した。平氏の流れを汲む家柄で、三浦為久<sup>たふひき</sup>が木曾義仲征討に加わって戦功を立て、壹岐国石田郡石田邑を領して石田次郎又は壹岐判官といったのが石田氏を名乗った初めである。為久の子孫為奉<sup>たふと</sup>が肥前国松浦に移り住み、その子孫為宣は龍造寺隆信の殊遇を受け、後に佐賀の多布施に住んだ。一鼎は寛永六年（一六二九）ここで生まれた。



石田一鼎の墓

幼名を兵三郎と称し、学問が好きで十五、六才のころ仏教・儒教の書を広く閲読していたと言われ、十七才にして藩主に「大学」を講義するほどで、当時では佐賀藩第一の学者と言われていた。藩主勝茂の近侍<sup>じ</sup>を勤めたが、勝茂の死後はその遺命によって二代藩主光茂の相談役として輔佐<sup>ほさ</sup>の任に当たった。

寛文二年（一六六二）三十三才の時、私利に走る一老臣を列座<sup>のし</sup>の中で罵ったこともあって、藩主光茂の怒

りを受け、小城藩王鍋島直能なほよしに預けられ、松浦郡山代郷やましろ（伊万里市山代町）に流された。ここに幽居すること七年余り、寛文九年（一六六九）に許されて佐賀に帰ったが、間もなく川上村平野に行き、後、大工坂口某を連れて梅野の下田に移り閑居した。延宝五年（一六七七）四十八才で髪を下し一鼎と改め、下田処士、願溪愚璞くぼくと号した。

下田での一鼎の生活は単なる閑居の悠々自適ではなく、忍苦の毎日であり厳しい修行であったと言われている。時には一鼎を慕い閑居を訪れて教えを受ける者もあり、山本常朝もその一人であった。又ある日弟子が台所に行くと、釜の中には蜘蛛が巢をはっていたので不審に思い、「いつ食事を取られたか」を尋ね、更に夜具もないのを怪しんでいると、「怪しむなかれ、ここは山中だ。果実もあれば野菜もある、釜を用いる要なし。夜具としては茅類が簇生しているので蒲団の要を見ず」といった。又弟子の下村三郎兵衛にも「寝られぬ時には寝ず、寝られる時に寝る、食われぬ時には食わず、食われる時に食う」といつている。「永々の浪人にて、酒などもまいるまじく」と尋ねたら一鼎は「山中にて見たこともなし。それよりは飯もなし、麦・そば・ひえなどを釜に入れ置き、望みの時に食べ申し候。汁も食べたことなし」と答えたそうである。

このような忍苦に堪えた一鼎であればこそ、山本常朝に対しての戒めの言葉に

「一鼎申されけるは、よき事をするとは何事ぞというに、一口にいえば苦痛さこらふる事なり、苦をこらえぬは皆悪しきなり。」とある。剛直一徹の一鼎は下田閑居によって磨かれ幅のある人柄、極貧の

中にあっても窮乏を楽しむ境地を開いた。「上長を敬うのは礼であって、その礼を守らないのは道に外れる」とか、「世の中には頭の働きの早くない人もある。その人が埒があかぬといつてあせり、横からその仕事に手出して裁こうとするのは必ず外れる。なぜならば人が立てた計画の中で他の者が自在に働けるものでないからである。」とも言っている。

一鼎は佐賀武士道の開祖ともいうべき人で、郷土の下田で書いた「武士道要鑑抄」は葉隠の先駆をなすもので、葉隠は武士道要鑑抄の説明書と言われるのもそのためである。要鑑抄の中に

「士の意地（面目）を失はしむるは皆敵なり。その敵には六種あり。一には睡眠、二には酒食、三には好色、四には利慾、五には高貴、六には功名。この六種は外の敵なれば防ぎ易し。外の敵を見る時内の敵起り、内の敵起る時誓願の剣をもってこれを断てば、内の敵起ることなし。内外敵なくして主人の御用に立つことが出来る。」

と述べている。時代は違ってもその精神は今の時代にも生きる尊いものではなからうか。一鼎は下田に閑居すること二十四年間、元禄六年（一六九三）の十二月二十一日（新暦翌年一月十六日）年四十六才で死去したが、墓は下田と佐賀市精町水月庵しみづらとにあり、下田の庵跡にある苔むした自然石の墓石には「梅山一鼎処士、圓室貞因大姉」と刻まれ、夫婦が祭られていて、付近の人々はこの祠を「一鼎さん」と呼び、「勉強の神様」として尊んでいる。国道端には肥前史談会の標柱が建っていて、道行く人々に何事かを呼びかけているようである。大正四年（一九一五）十一月十日大正天皇の即位の御大礼に当たり、



常朝垂訓碑 (金立)

佐賀藩武士道の興隆に尽くした功を追賞されて正五位を贈られた。

(3) 山本常朝と大小隈

常朝は佐賀藩士山本神右衛門重澄七十才の時の子で、万治二年(一六五九)六月十一日佐賀城下片田江横小路に生まれた。九才で二代藩主光茂の御側付小僧となり、延宝七年(一六七九)元服して権之允と改称し、その後御書物役に進んだ。二十才のころから仏道に志し、当時佐賀藩第一の碩学石田一鼎を下田の閑居に訪れて薫陶を受け、更に松瀬の華藏庵で湛然和尚の教えを受けた。元禄十三年(一七〇〇)五月光茂が死んだのでその寵遇に感動していた常朝は追腹をしたい気持で一杯だったが、主君の追腹禁令を犯すことはできず、殉死の志を満ししかも藩令に背かない出家の道を選び、金立の黒土原に閑居した。田代又左衛門陣基は延宝六年(一六七八)に生まれ源七と称したが、後光茂に仕え祐筆役となり、元禄九年(一六九六)十九才の時藩主綱茂の祐筆役にもなったが、宝永六年(一七〇九)三十二才で御役を免ぜられた。翌年三月始めて常朝を黒土原の草庵に訪れた。その時常朝はす

にここでの生活が十年経っていて、これから享保元年(一七一六)まで前後七年間にわたって陣基は常朝の談話を筆記し、享保元年九月に脱稿したものが「葉隠」である。七カ年の前半は黒土原の宗寿庵で、後半は大和町大小隈で筆記している。常朝は九才より光茂逝去まで側近に仕えること三十余年の間、常に「我一人にて御家を荷う」という葉隠の精神で忠誠を尽くし、神仏を信仰することも厚く、国学や武芸にも達し、和歌・俳句にも堪能であり「愚見集」を書いて奉公の心得を論じた。光茂夫人靈寿院は黒土原(金立町)で夫君の菩提を弔い、正徳三年(一七一三)ここで逝去した。その遺志によってこの地に葬られたので、常朝はその墓所をはばかって、同年十月十三日大和町大小隈に庵を移し、享保四年(一七一九)十月十日六十一才でここに歿した。この辞世の句に

尋ね入る深山のおくの奥よりも しづかなるべき 苔の下庵

虫の音の よわりはてぬるとばかりを かねてはよそに 聞きて過ぎしが

とあり、墓は佐賀市鍋島町八戸の龍雲寺にある。田代陣基は葉隠を脱稿した後再び祐筆役となり、寛延元年(一七四八)に年七十才で歿した。陣基の墓は佐賀市東田代町の瑞龍庵にある。

大小隈は今日通称「でやーししょうぐま」と呼ばれていて、敷山神社跡より東北約三百メートル余り、大和町礫石の古川八太郎氏宅北方の柑橘園で、東を流れる小川(金立町との境)の傍らの柿の木も、庵跡に建っていた付け木(薄い板の両端に硫黄を塗り付け火をたきつける物)工場も、硫黄を砕いたと思われる水車も今はなくなって一面の密柑畑と化しているが、東に迫るような雑木山と清らかな小川のせ

せらぎは昔の面影をしのばせるものがある。

#### 4 安住勘助と芦刈水道



安住勘助の墓

安住勘助は「道古」という名で知られ、今でも土地の人は「ど  
うこさん」といっている。小城藩士でその先祖は安住石見守秀  
能といい、秀能の妻の於レンは鍋島直茂の姉に当たる人である。  
勘助の父清右衛門は小城藩祖元茂に仕え、佐保川島郷池上村に  
住んでいて、田三十六町に禄高六十石をもらっていた。

勘助は小城二代藩主直能の時、芦刈方面数千石分が水利に乏  
しく耕作に困っている様子を見て、何とかして川上川の水を引き入れようと思い、先ず川上川の流水の  
方向を調べようと、深夜ひそかに川上川に泳いで調べること七夜に及んだといわれている。やっと自信  
を得て、藩主直能に進言し、その命を受けて当時としては思いも及ばぬ立派な芦刈水道を完成させるこ  
とができた。すなわち、現在の官人橋の下流約五十メートルの所（淀姫神社石段の東側）より分水し、  
川上地区を横断して三日月町、牛津町を経て芦刈町に及ぶ約十二キロの灌漑用の水路を作った。これが  
芦刈水道である。その一部は吉富部落の戸立とたによって南に分水し、東芦刈水道となって芦刈町に及んで  
いる。本流の芦刈水道は途中で幾つもの河川を横断するので、この交差については特に苦労したと思わ  
れ、小城祇園川と交わる所では底井樋を架して水を越えさせ、牛津の道路には石井樋を設けた。これが

今日の乙女井樋で、この傍らの悪水吐が友田井樋である。こうした井樋の工夫は今日もお土工の範と  
され、この芦刈水道の完成によって恩恵にあずかる農家は生氣を取戻し地域発展のもととなった。

この芦刈水道の建設者に就いては「大楠風」「偉人成富兵庫」「成富兵庫を語る」等によると成富兵庫茂  
安であるとなり、明治十三年（一八八〇）七月、長崎県よりの河上川等についての問答書にも、

『芦刈方面及び新田等の作水の乏しきため、寛永の始（一六二四）成富茂安これをなすという。この  
井樋の水上河上宿の桜馬場の辺りより井樋口下まで河中に細長き島があつて分水していた。この島も成  
富創業以前は無かつたという。延宝の頃（一六七三——一六八一）藏人頭くらんどのかみ（御勘定奉行の職）多久兵庫  
安胤は分水上一の杭、二の杭など建て井樋口の川濬えせらぎをしていた。』

とあるが「直能公御年譜」附録や土地の人々の伝承では安住勘助の仕事ということになっている。

「直能公御年譜」附録には次のように記してある。

『直能公御代、御領分芦刈数千石の所、水少なく候て、耕作難儀候に付き、安住勘助存立にて川上河  
より水道を掘り申すべくと、水上より夜なく遊あそび、流れを試み候こと七夜ほどにして、水行を考へ今の  
水分けの所より水道を掘り候へば、芦刈に水懸り不足これなきと積り置き候由、佐賀の方へ下り候地形  
は少々高くこれあり、小城の方へ低くこれあり候に付き、佐賀役々申談じ、佐賀へ七部通り、小城には  
三部通り定めこれあり、右の通に候へば、芦刈の水不足これなく、其上は用なしとの積り也、其後勘助  
頭取にて只今の芦刈水道を掘申候、しかるところ元禄十三年頃、佐賀の方より石荒籠いらかごを入れ候に付き、

小城の水行細く相成候故、川口取合始まり、宝永・享保・元文の頃に至っても色々取合むつかしく相成候へ共、近世淀女ヶ淵の上なる石荒籠出来候より、却て小城の方への水行に障これなく、川口取合の論も相止め候也。」

勘助は貞享元年（一六八四）六月九日死去したが「……鳥の為に害せられて死去す……」とあり、一般には「道古さんは鳥の為につき殺された」といわれている。これは芦刈水道を開くことが、本藩と小城藩との間に問題化して、本藩の圧力で担当者安住勘助が普通の死に方をしなかったということであろうか。勘助の子孫はこの後浪人させられたという。

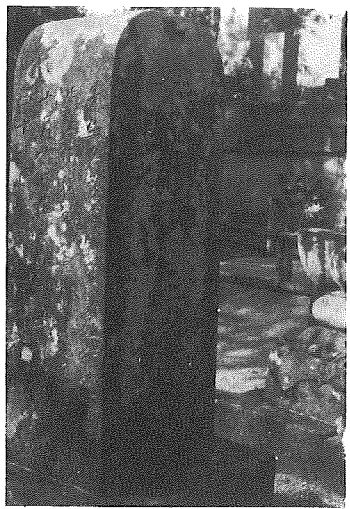
墓は佐賀市田代二丁目の瑞龍庵にある。墓碑には俗名安住閑介、一寧道古居士、正円良貞大姉 貞享元甲子年六月九日とある。

##### 5 志士 横尾紫洋

尼寺の春日小学校西側長谷寺に横尾紫洋の墓があり、

「横尾紫洋先生之墓、先生名は道符字は孟篆姓横尾氏號紫洋通称文輔、享保十九年季甲寅十月十日生、天明四年甲辰十月二十一日卒、春穉五十有一」

と彫つてある。紫洋は川久保にいた神代氏の家臣で、通称を文輔と呼び、磊落で気節に富んだ勤王家であった。幼少のころ、春日山高城寺の住職について読書の道を学び、後に長門の国の瀧鶴台の門に入って勉強し、立派な儒者となった。当時の皇室は非常に衰微していたので紫洋は何とかして盛んにしたいと



横尾紫洋の墓

思い、有志の者と計ってひそかに計画を立てていたが、幕府の勢が強くついに佐賀へ逃げ帰り春日山に居を構えた。勤王の大志を抱く紫洋は子弟の教育こそその本をなすものであると考え、子弟を集めて忠君の大義を鼓吹していたが、安永三年（一七七四）六月、再度藩を脱出して京都に上り、関白九條公から手厚い待遇を受けることとなり、間もなく公の侍講となった。

ある時、日光の東照宮に参ったが、たまたま徳川將軍の参拝の行列に出合い、その盛大なのに驚き、かつ憤慨して京都に帰った。そのころ京都は大風雨が降り、鴨川の水が氾濫して公卿の邸宅はほとんど破壊されていたが、幕府はこれを傍観して顧みなかった。紫洋は怒って何事かをなさんとしたが、藩は心配して帰国命令を出した。しかし紫洋はこの帰国命令に服しなかったので、捕われて佐賀へ護送され、小城郡芦刈村（現芦刈町）永明寺に幽閉された。ここで一年有余を過したが、脱藩の罪名のもとに天明四年（一七八四）十月二十一日、この永明寺で斬罪に処せられた。年五十一才であった。当時この哀れな最後を惜しまぬ者は無かったといわれ、大和町内の勤王家は尼寺長谷寺に墓を建ててその死を弔ったのである。わが国の俗謡の中の傑作と言われ、全国的に知られ親しまれている次の歌は春日山高城寺に

いた時の紫洋の作である。

「高い山から 谷底見れば 瓜や茄子の花盛り」(民俗編参照)

これは友人であり、儒学者であった古賀精里が幕府に仕えて、自己の栄達を欲したことを嘲笑して作ったものと言われ、高い山に立ってみると、瓜や茄子のような卑しい人間がおごりたかぶっている情ない世の中だと皮肉ったものであろう。



額居鳥の妙見社の

紫洋の人格は営利栄達を目指すことなく確固たるもので、勤王の精神に徹した人であったという。大正十三年二月十一日特旨をもって正五位を追贈され、その忠誠を賞せられた。ついで大正十五年には有志の人々により「横尾紫洋先生之碑」が芦刈町永明寺境内に建てられた。紫洋が春日山で子弟の教育に当たっていたころ、福島村妙見社鳥居の額を書いたと言われ、その額は紫洋が斬罪に処せられたため、藩公をはばかりこれを取り除いたと伝えられている。その額は現在同社に掲げられている。

## 6 歌人 今泉蟹守

梅のやま 月たちのぼれ 河上の やなせに落つる 鮎の数見む

この歌は佐賀が生んだ歌人今泉蟹守が川上峡をよんだもので傑作の一つである。

蟹守は文政元年(一八一八)に佐賀市与賀町に生まれ、名を則才、通称を隼太後に御蒼生と改めた。



今泉蟹守の墓

又鞆の屋、黎樹園、臍隣居等の別号があり、和漢の学に通じ、歌道には特に秀で佐賀における歌仙と称せられた。蟹守は勤王の志が厚く「勤王百首」を詠んで、その燃ゆるがごとき精神を歌に托したので、若い有為な青年達が続々とつめかけて教えるを受けたといわれている。著書も多く、樟葉十家歌集、白縫集、鳳鳴和歌集、明倫百人一首、樟葉百家選等がその主なるものである。晩年は大和町

の大願寺と佐賀市高木瀬町長瀬とに居住し、明治三十一年(一八九八)二月七日に大願寺で死去した。年八十一才であった。大願寺西部高段墓地に蟹守とその妻イソ子の墓があり、川上の実相院には弟子達が師を慕って建てた碑がある。なお佐賀市高木瀬町長瀬源太松の南側にも墓が建てられている。

蟹守の直孫、今泉大成氏は現在京都府乙訓郡向日町寺戸東野辺に在住されていて、佐賀大学教授中原勇夫氏監修による「今泉蟹守歌集」を昭和四十六年に発行された。

## 7 国学者 永山貞武

名は貞武、一名は普、字は徳夫通称を十兵衛と称し、後に寛助と改め字亭又は二水と号した。幼少のころより藩学で勉強したが、その努力振りには他に比べる者がなかったといわれている。二十二才の時に

肥後の国に行き、辛島塩井の塾に入って五年間勉学に努力し、立派な学者になって佐賀へ帰ってきた。それから間もなく「国学指南」に任ぜられ、文政十二年（一八二九）には外小姓兼侍講に任ぜられたが、その時二十八才であった。その後閑叟公が藩主となった直後「奥小姓兼教諭」に任ぜられ、側目付に昇進した。天保十一年（一八四〇）に藩主閑叟公と江戸に上り、ついでに東北の諸地方を巡覧して帰り、

「庚子遊草」という本を著した。

天保十三年には手明槍頭兼請役相談役格に進み、天保十四年に御側頭となり、閑叟公のために精励格勤よくその誠を尽くした。その後病氣になり辞職隠退を願ひ出たが許されず、弘化二年（一八四五）七月二十日（新曆九月一日）在職のまま死去した。年四十四才の若さであったので誰一人として惜



墓の貞武の山永

しまぬ者はなかった。惜しい人物を失った閑叟公は、翌年八月哀詞を贈り、供養の費用を支給すると共に禄高も増加した。閑叟公は長い間の弊害が続いた跡を継ぎ、その上本城が火災にかかり、飢饉も度々来て極度に財政困難に陥ったが、藩主となってから十年もたたない間に紀綱は整い、風俗は一変して官制の改革、軍事拡張、学校増設、農政整備等、藩の面目を一新するに至ったのも、貞武の企画経営に待つところが多かった。貞武は又已おのれを持することは厳格で人には寛大であり、家のことはできるだけ簡にし、

事務の処理は実に敏捷びんしょうであった。大事にあえば沈着冷静に事に当たり、小事といえども軽々しく観過することがなかった。加うるに精力絶倫で常に学問の淵源を究めようと努力した。初め朱子学を学び、後考えるところがあつて陽明学も兼修した。常に我が国の儒者じゆしやが世間の事情にうとく社会の役に立っていないことを慨嘆し、熊沢蕃山ばんざんを手本として身を修め、実用を第一として無用の学問を捨て、簡易を尊び、形式的な面倒臭い手続き等を避けるよう心を砕いた。貞武の文章は文章辞句が明切で有用の言が多く、又時にはしまりのない気ままな慷慨こうがいの文を作って読者を激昂奮起させるようなこともあつた。天保七年（一八三六）川崎駅で一橋家の家臣が不敬な事件を起こした時、閑叟公は貞武を江戸にやつて密旨を伝えさせた。貞武は慨然として出発の途につき神奈川を過ぎる時一詩を作った。

既将一死付鴻毛

乗月吟遇金水涛

料理機宜諸老在

腰間笑撫菊池刀

貞武は又体力が衆に抜きんでてすぐれており、時に馬にむちうち剣道に励み、威風堂々、気高く雄々しく自からよく節操を守った。平素は大変貧しかったが、武器は精一ぱいの力を出して買ひ求めていたという。墓は実相院裏の墓地にあつて貞武の業績を刻んでいる。碑文は幕府昌平学校教授佐藤担、筆者は閑叟公に殉死した古川松根である。子孫は現在鎌倉市に在住されている。——佐賀先哲叢話——

## 8 大木喬任と山屋敷

大和町大字久池井字春日の浦田に山屋敷という所がある。明治維新の大功労者大木喬任が少壮のころ公務の余暇あるごとにここに来て静かに勉強したと言われている。当時の家屋は八疊二間で、一間は南

方に一段高く突出しており、奥に六畳一間と物置があり、玄関わきに炊事場があるという間取りであった。周囲は竹やぶになっていて、ここから眺めると佐賀市はもとより有明海方面から遠く多良の山々も望むことができるという絶景の地である。



大木喬任

正二位勲一等伯爵大木喬任は天保二年（一八三二）佐賀市赤松町に生まれ、幼名を幡六と言ひ、後に民平と改めた。幕末には佐賀勤王党として副島種臣・江藤新平・大隈重信らと東奔西走し、版籍奉還には特に功労があった。明治になってからは東京府知事を初め、新政府の要人として活躍し、その後元老院議長、司法大臣、文部大臣などを歴任したが、特に司法大臣としては令名が高かった。伯は又江戸遷都の主唱者の一人であり、東京遷都決定に至る功労者であった。葉隠の雲に『大木喬任は事務をとるに、常に熱心で少しも懈惰（なまける）の模様がなかったから、岩倉公や閑叟公から大変に重んぜられていた。初め閑叟公に御伴（おとも）して京都に出かけた時、南白（江藤新平）らと共に時事を慨し、連署して岩倉公に上書し、江戸を東京と改め、速かに遷都せられて治国の基礎を堅くせられんことを願った。

岩倉公はこれを楽しんだ。しかし、そのころは幕府争乱のために、まだ江戸は鎮定しておらなかった。廟議（朝廷又は政府の評議）もまちまちで決定することができず、月日を過して時機を失わんとしたので

ある。大木はたいそうこれを心配していた。たまたま木戸孝九が長崎から帰って来たので、岩倉公は大木と木戸とに遷都のことを相談せしめた。木戸もその策を聞いて、大いに賛同し異議あるものを排斥した。これから両人は東西に奔走して、ついに遷都に決定したのである。明治元年九月二十一日には、文武の百官を随えさせられて、東京に行幸あらせ給う様になった。』（以上要約）

と、東京遷都への大木喬任の努力が記されている。

大木喬任は明治三十二年（一八九九）六月、年六十九才で亡くなったが、その時に臨み桐花大綬章を賜わった。昭和二年になって、喬任を慕う有志の努力によって、旧宅跡である佐賀市水ヶ江（龍谷高校南東、現南水会館）にその記念碑が建設され、今日もなお喬任の偉大なる功績を伝えている。

春日の山屋敷のあった所は、現在谷口米男氏の宅地内で、大木伯記念会より「大木伯畫齋跡 昭和九年六月吉日」と記録した石柱が建てられている。

## 六 郷土特産物の開発

### 1 今山焼

大和町横馬場部落（当時は今山に含まれていた）の北方、小さい溪流を渡った柑橘園の地中から、無数の焼物台や築造窯の破片が発見された。この破片の一部が現在は石垣石の代用として積み上げられて